

アチーブ・ジョブズ(通称アチーブ)は、2017年の初夏から始まった、女子学生によるいわば自主ゼミナールのようなものです。「男性目線のための女子力UPではなく、自分のために自分の仕事と社会について考え、得られた知識を仲間と共有するサロン」として始めました。

現代教養学部は新設の学部で、先輩からの情報に頼ることができない。だったら自分たちで行動して、自分たちで情報を集めて交換をしよう、と。大学は、個人の自主性を重んじるがゆえに、友人やゼミ以外の接点がない場合も多い。日ごろそれほど親しくない他の女子学生が何をやっていて、何を考えているのか？ 他人の話を聞けば自分を客観視でき刺激になるのでは？ そんな場を想定しました。

毎回テーマがあり過去には、M氏に就職課の利用方法を伝授していただき、また各自でエントリーシートを記入してみました。さらに目線を社会にむけて若年女性の貧困の実態を知るなどといったテーマもありましたが、現代教養学部には皆川満寿美先生のようなジェンダーの専門家もいますからね…アチーブでやることはないな、と。

就活が念頭にはありましたが、授業でもサークルでもない形で不特定な女子学生が自分の来たいタイミングで集まる出入り自由な場所ですし、縛りも義務もないですからね。良いのか悪いのか、私の中の高い目標がだんだん変化して、最近は学生の顔を見て、元気そうでよかった、とか、そんなレベルになっています(笑)。

本当は、女子学生が「自分のことを語る」その時間こそが大切なのだと、最近気づかれました。いわば、雑談です。彼女たちはきっと自分たちが思っているよりも、論理的に本質を見抜く力もある。最近、私が個人的に面白かったのは、「就活でピアスは穴を塞ぐべき？ 塞ぐならもう始めないと間に合わない！」という発言(笑)。結局、彼女たちが雑談の中から導き出したのは、就活の装いや女性のフォーマルなモデルとは皇室女性のファッションではないか？という着地点。皇室の女性たちは誰もピアスの穴を開けて

いない。柄物のスーツも着ない。数センチのヒール。そういったコードが結局のところ、私たちのフォーマルなものの基準なのではないか？ 鋭いな、たいしたものだ、と思いました。

最近、どうして就活で痛い思いをしてヒールのある靴を履かねばならないのか？というある違和感がtwitterで話題になりました。が、アチーブで出てきた論点に照らし合わせていえば、皇室の女性の装いが私たちの想像力におけるフォーマルということになるので、業種によって違いはあれ、残念ながら服装のコードの基本路線は続くであろう、ということになる。一方で、皇室の女性がお手本としているであろうフォーマルな基準というものも別途あるわけで、この問題は一筋縄ではいかないのですけども。

さて、話が少々脱線しました。最後に今後のアチーブの活動方針はどうするか？ それを紹介しておきたいと思います。2本だてになるはずですが。一つ目は、数ヶ月に1度集まって、その間何をやったか、どんなことがあったかを報告します。雑談です。プラス、勉強して欲しかった資格がとれたなどのお祝い事があったら、お茶飲んでパーティ。こんな感じでしょうか？ 初年度はなぜか、数名で手賀沼にボートを漕ぎに行ったこともありましたが(笑)。学生たちはさすがに元気でしたが、私は疲労困憊で目の前に黒い蝶が飛んでいるのが見えた(笑)。もう今後はずっとインドアで(笑)。

二つ目は、女性のゲストを迎えて少し話してもらうことです。私自身が興味のある女性をお呼びして、若い女子学生に伝えたいことを語ってもらえたらと思っています。将来的には、アチーブに参加してくれた女子学生が、今後中央学院大学を卒業してさまざまな場所で活躍し始めて、彼女たちがゲストとなってアチーブで話をしてもらいたい。そういうクールな循環が生まれることを楽しみにしています。



現代教養学部報

CHUO GAKUIN UNIVERSITY

平成31年3月6日発行

公正な社会観と倫理観をそなえた自立した個人の育成をめざし、現代を生き抜くための教養教育を通じて、地域や社会、政治や経済との関わりの中にある自己を深く知り社会参画や社会貢献ができる市民を育成することを目的とする。



from 学部長

ごあいさつ — 三年目の春を迎えるにあたって

学部長 佐藤 寛

現代教養学部は3年目の春を迎えました。今年もまた豊富な教育経験と高い研究業績をお持ちの先生方が着任され、専門教育課程を中心に新たな講義科目が開講されます。これにより、2017年4月からスタートした新学部の教育、研究体制の整備が完成いたしました。

幅広い教養教育や体験学習などを通じて、現代を生き抜く「教養」を身につけた「ジェネラリスト」を育成するという、教育目標に対する実社会からの期待や、学生たちの真摯な眼差しにどう応えていくのか、現代教養学部の力量が試されています。

こうした期待に応えていくため、皆さんの人生を大きく方向付ける大切な4年間で、充実した学びの場となり、皆さんが社会に貢献できる能力(生きる力)を身に付けることができるよう、研究、教育、社会

貢献活動など、学部教育の質を向上させるための基盤づくりに、教職員が一丸となってこれからも取り組んでいきます。

この取り組みの一環として、先般、現代教養学部教員の研究、教育の成果を発表する「中央学院大学現代教養論叢」の創刊号を発刊することができました。

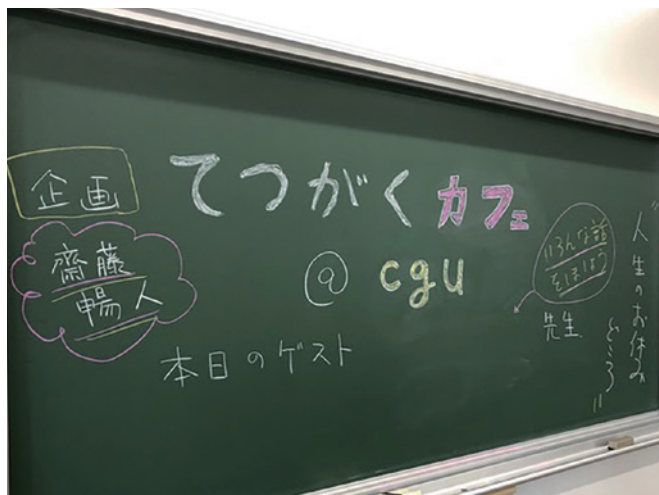
学生の皆さんも、先生方の研究や教育実践の中から生みだされた諸論考が収められた本書を是非手に取り、学問の面白さや深遠さを味い、自らの教養を深めていって下さい。

新しい季節が始まりましたが、私たち教職員一同はこれからも“STAND BY YOU”をモットーに、君たちの将来の夢を実現するためのサポートに、情熱の火を燃やして続けていきます。



あびこ祭での現代教養学部企画立案、実行という大役を仰せつかった当初はよい考えが浮かばず途方に暮れたが、「哲学カフェ」を開くことを思いついたとき、これならなんとかなるだろうと、我ながら一安心した。「哲学カフェ」は、哲学的なテーマに関心をもつ人々が自発的にカフェに集まって議論する、というイベントの一種で、90年代にフランスで始まったと言われている。00年代ごろから、日本でもこうしたイベントが試みられるようになり、現在では各地でさまざまな「哲学カフェ」が開かれている。そのなかには長く続いているものもあれば、短期間で終了するものもあり、また、多くの人々が参加するものもあれば、少人数でこじんまりと開かれるものもあって、千差万別である。テーマも幅広く、基本的には何を採り上げててもよい。一般の人々が参加するためのハードルを下げるためには、現代社会、現代文化の論点や流行現象を採り上げるのが無難であるが、参加者の興味のもち方によっては、形而上学の深遠な問題をじっくり論じ合うのも一向に差し支えない。たとえば、「少子高齢化」「憲法」などといった話題から、「時間」「死」のような話題まで、好きなことを語り合うのである。こうした融通無碍で、どこかたとえばどこもない社会現象ではあるが、一部の人々のあいだでは話題になり、世間の関心もそれなりにある、という報道もある。こうしたイベントには、いわば哲学の実験という側面もある。実学とは対極にあると考えられがちな哲学に何ができるのか、という興味もあり、企画としては悪くないと思われた。

アイディアはまずまずのものが生まれたものの、実行という側面では問題があった。残念なことに人手が足りないのである。これは、イベントを開催する上では結構なハンディである。そこで、会場の準備や飾りつけ等の準備は極力簡素にすることにした。また、「カフェ」と称しながら茶の一杯も振舞えないのはおかしい。会話も弾まないだろう。そこで、紙コップとペットボトルの飲料、駄菓子を用意することとした。無論、より凝ったもてなしができればそれに越したことはないのであろうが、調理のプロセスが介在すると労力が格段に大きくなって、今回は手に余るように思われたので、当日の応対と対話に力を注ぐことを最優先とした。



おおまかには上記のような素朴な企画なのだが、もちろん、このイベントに関する方針はこうした「省エネ」一辺倒だったわけではない。哲学カフェとしてその場のコミュニケーションが盛り上がるように、当日はゲストをお二人お招きすることとした。染谷昌義高千穂大学教授と鈴木由加里法政大学講師のお二人である。いずれも哲学を専攻する研究者であるが、コミュニケーションのスキルが高く、信頼のおける素晴らしい人物である。彼らとの日程の調整などはそれなりに手間がかかった。大学関係者は多忙であり、彼らがこの企画への参加を快諾してくれたことは本当にありがたかった。ここに改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

こうした準備の下で10/27、28の両日、「哲学カフェ @CGU」が開催された。蓋を開けてみれば、来場者は二日間の延べで100名近くに達し、事前の宣伝等も全くしなかった割には、集客という点では成功したようである。ちょっと思いがけない結果であって、これには正直なところ驚いた。来場者の数は集計していたが、各自がどのような人物であったのか、という質的な分析はおこなっていない。しかし、来場していただいた皆さんに共通の傾向とおぼしきことがあり、それは、皆さんがとても話したいという意欲をもっていたことである。多くの人が一時に会場の教室に集まって、来客同士で議論を戦わせるという、おそらく本場の欧米の哲学カフェではありそうな光景は見られなかったが、三々五々人が集まり、それぞれ自分自身の思いを語ってゆくのである。私やゲストが無聊をかこつ時間はほとんどなかったように思う。皆さんが語る内容はそれぞれ多種多様で、正直なところ哲学とは関係のない話題、世間話的なものもふくまれていたが、それでも、それなりに日常生活を俯瞰し、自分自身の周囲の世界の仕組みについて説明し、思考しているように感じられたのである。おそらくそうした事柄は、家族のなかの会話、本当に親しい友人同士の日頃の会話では口にしにくいのであろう。生活のなかの会話には実用的な目的があり、そこから外れてゆくような話題は忌避されるのかもしれない。悠々自適の生活を送っていらっしゃるようにお見受けする高齢の方々でも、そうした話題についての対話を楽しむ時間がもてないということは、それなりに多忙な

生活を送っているのと変わらないのかもしれない。そういった次第だったので、私もゲストも、「プロ哲学者」としてこちらから高説を垂れる、といったことには全くなかった。むしろ、いろいろな方のお話を興味深く拝聴する側に回っていた。これは、哲学カフェの本来の趣旨からすれば正解のようである。哲学カフェというイベントは、本来が日常におけるさまざまな疑問を、みんなで自由に批判的に検討するというものであり、こうした場合は、少し大げさに言えば、民主主義が育つための土壌でもある。異論をぶつけ合うことは認められるが、権威が意見を抑圧することはあってはならない。あくまでも水平的に対話が広がってゆく場でなければならない。

今回は会場の反応を重視し、事前準備を入念に行う展示のよう

現代教養学部の学びには「教室を超えた学び」というものがあります。もちろん、学外というフィールドから学びを得ることを主としていますが、教室の外でありながら、学内での学びのフィールド。その一つが「あびこ祭」ではないでしょうか。そこで、H30年度は基礎演習における学びとして、あびこ祭に出店を計画しました。うどんの販売ということについては、私が決めましたが、そこからは、どんな麺を使うのか？トッピングは何にするか？価格はどうするのか？どれだけの量を準備するのか？役割分担はどうするのか？看板作成等々、学生が様々なことを検討し、準備しました。関わりとしては、濃い学生と薄い学生が出たことは否めませんが、終わった時には、「〇〇さんの負担が大きすぎた。」「空いている人がもっと仕事を見つけて動くべきだった。」などの気遣いの大切さ

や積極的に動けなかったことに気づかされていた様子でした。社会経験としては、アルバイトも良いと思います。しかし、すでに形のあるところに入るのとは違い、形を作る作業を同じ立場の学生同士で



な場ではなく、いわばライブのような場を志向した。こうした場合は参加者の精神に強く作用するが、一時的ではないもの、という特徴がある。あびこ祭の企画としては、この一時的な性格はやや弱点であろう。蓄積できる成果を残していくところには、さらなる工夫の余地があるかもしれない。ただ、今回の企画で得た教訓には恒久的な価値がある。人々が自由に集い、自由に語る場を用意することは、それだけで人を集めるだけの力を生み出すのかもしれない、ということを認識した。「哲学」という学問がこれまで蓄積してきたブランド力が集客のためには最後には物を言ったのかもしれないが、その意味で先哲の偉大さを再認識したイベントであった。

行うことにより、協力する必要性に気づき、責任感や積極性が生まれると私は考えています。また、1年次に大学行事に関わることで、後の3年間への意識の変化に繋がって欲しいと願っています。

最後に、次回も基礎演習の企画として取り扱うべきかを学生に尋ねると「いいと思う。」という返答をもらいましたので、学生生活の幅を広げるとともに学生が自分自身への気づきの場として、次回も出店したいと思います。そして、グルメコンテスト入賞を狙います！